

一 基調講演 一

「外来語と日本語教育」

柴田 武

本日は、「鏝日本語教育研究会」の、発会式だと伺いましたが、その第一回の集まりの、基調講演に招かれましてたいへん光栄に存じております。「鏝日本語教育…」、私は目が悪いものですから、「鏝」というところがよく見えなかったんですけども（笑）、こういう研究会に、何とか記念とつくるのは、たいへん珍しいことではないでしょうか。そのぐらい小出先生と日本語教育というのは、日本語教育は小出先生、小出先生は日本語教育と…この「は」の使い方が正しいかどうかは別といたしまして（笑）、というふうに私は考えております。私は日本語教育の近くまでは参りましたけれども、一度も日本語教育をやった経験はありません。また、日本語教育というもの自身について考えたことも、実はありません。しかし、今日はこういう会なものですから、「外来語と日本語教育」というように「と」でつないであるんですけども、どうしても話は「と」の前のほうにかたよるかと思しますので、ひとつお許し願いたいと思います。

今日お話ししたいことは、日本語の外来語というものを、やまとことばや漢語と同じように扱ってほしい、差別しないで扱ってほしいという、そういうことなのです。そうすることによって、いかにも日本人らしい日本語を話す日本語学習者というか、外国人をつくり出すことが出来るだろうと、こういうことです。「いや、私は外来語もやまとことばも漢語も差別なんかしないよ」というふうなお考えの方は、あとは居眠りをするか、外へお出になっても結構でございますが（笑）、そういう趣旨のことを、二、三お話ししたいと思います。

どうも私が見るところ、日本語教育には関係がないと言いながら、例えば埼玉大学におりました時は、外国人が大学院へ入ってくる時の日本語の試験問題は私が作っていました。その時に外来語の問題を出すと、かならず全員0点でした。三年間出しましたけれど、三年間まったく0点でした。で、これはいっ

たい、どういうことか。どうもその時から、外来語というのは日本語教育における弱い点、ウイークポイントではないかということを感じておりました。もちろん、埼玉大学に来た受験生が皆、外来語に弱かったのかもしれませんが（笑）。それにだいたい、試験で0点になる問題を出すというのは、試験問題の出し方としてはとてもいけないことですね。ちゃんと段階がつくような問題を出すのが、問題の出し方としては上手です。それは知っておりましたけれども、今日の話のためではないんですが、外来語には弱いんじゃないかということ、一年ではいけないから、三年間確かめて、私は自信を持つようになりました。

では、どうして、外来語が日本語学習者にとって弱点になるのかということの実情を、私は知りません。知りませんが、察するところ、やはり外来語までは手が及ばない、というようなこともあるでしょう。特に欧米の日本語学習者というものは、「日本の外来語なんておかしくって勉強出来るか」…つまり、彼らから言えば、訛りに訛った変な言葉、しかも意味も少しずれている。そういう、つまり、間違ったというか、くずれた英語まがいなど勉強する気にはなれない、ということが働いているかもしれません。一方、アジアの学生諸君はどういう気持ちを持っているか。どうせそんな、曲がった英語を勉強するより、ほんものの英語を勉強したほうが良いと思っているのかもしれませんが。ほんとうにまじめに、外来語も日本語の一部だとして勉強しようという、その姿勢が出来ていないのかもしれない…というような、これは全く私の憶測です。全部、当たってないかもしれませんが。そこで、今日、その外来語のことを少しお話ししたいと思ったわけでありませう。

いったい、外来語といいますと、これはもう皆さんもご存じのように、特に欧米から輸入した、借用語であると言われております。辞書にも、そう書いてある。ですからむしろ、外来語と言うよりは「舶来語」とか、「洋語」（西洋の洋に語）と言ったほうが良いのではないかと。私もときどき洋語という用語を使います。しかし、ちょっと考えてみると、どうもおかしい。と言いますのは、例えば、NHKの『発音アクセント辞典』を今、基準にしてお話しいたしますが、その中に、例えば「ヨガ」という言葉が出ている。サンスクリット、インドの言葉ですね。で、このヨガというのは欧米の言葉ではないから、じゃ、

外来語ではないかという、カタカナで書きますし、外来語にしていいんじゃないかと思えます。あるいは、「ルピー」という、インドとかパキスタンのお金の単位があります。これも、外来語ではない、とは言えない。外来語と言っていいでしょう。「ガムラン」という楽器がインドネシアにありますけれども、インドネシア語のガムランという言葉とか、あるいは「バザール」という、これはもともとペルシャ語、イラン語です。こういうような言葉は外来語と考えていいんじゃないか。だから、決して西洋の洋だけではなくて、他の地域の言葉も、外来語と言っていいんじゃないか。

どうも、外来語といえないのは何か、ということをつきつめて考えてみますと、まず、中国語。これは外来語と言えない。韓国語。これも外来語とは言えない。どちらも漢字を使っている言語です。それから、アイヌ語が、言えるような言えないような…「コタン」、カタカナで書くと、なかなかしゃれた、いい言葉ですね。しかし、これはもう、外来語…とはちょっと、言い難いような、言えるような感じであります。いま、仮に、アイヌ語をその仲間に入れると、中国語、韓国語、アイヌ語は非外来語、それ以外の地域の言語を外来語といっているんだということを、実は最近になって私自身、気づいたようなわけあります。

アイヌ語、中国語、韓国語を除いた地域から借用した言葉を、特別に「外来語」という言葉で呼んでいるということ、このことは日本の文化の上でたいへん意味のあることでありますが、そういうことは今日申し上げません。いったい、ここで定義した上の外来語というものが、私たちの日本の文化の中でどういう位置にあるのかを、考えてみたいと思います。まず第一に、明治維新の時の近代化ということに始まっていると思います。近代化というのはどういうことかという、ヨーロッパの真似をするということであったわけです。真似をして、追いつこうとした。結局追いついているわけですがけれども、ヨーロッパの真似をする近代化です。で、この線に乗って、外来語というものが入って来る。ところが、明治の初期の頃には、その入って来たものを、いわゆる今われわれのいう外来語という形ではなくて、漢字を二字組み合わせることによって、きわめて人工的に組み合わせることによって、それに対処したわけがあります。膨大な、ヨーロッパからの近代的な概念というものを漢字二字の組み合わせに

よる単語によって処理をした、ということでもあります。で、それで処理できないものは、カタカナで書く。つまり、われわれがいま言っている外来語というようなことで済ませてきたわけでもあります。

これは後で話に関連しますので、もう少し申し上げますと、例えば、英語から「カンパニー」という言葉が入って来た。どう、訳すか。いま、「会社」と訳しております。何か、最初は「社会」と訳したんだという話がありますけれども。「会社」という言葉は中国語にはありません。それから、いまの「社会」にある、ソサエティとは別の意味でした。社というのは、その土地で祀っている神様を共通に信仰している人たちの会合、集まりというような意味。あるいは25ひと組の、隣組にしては大きいんですけれども、大きな隣組。そういうようなものを中国では「社会」とは言っておりましたけれども、いまわれわれが言っているコミュニティというような、あるいはソサエティといったような意味の社会ではない。これは、日本で人工的に造りあげたわけです。社と會。社も會も、人の集まりとか、人が集まることとかいうような意味を持った漢字で、それをくっつけたわけです。ですから、おそらく、その当時中国人にとって、日本の「社会」とか、「会社」とか、あるいは、社でいえば、「社交」とか、社団法人の「社団」とか、「社長」とかは、皆、おかしい漢字言葉だったと思います。ちょうどいまのアメリカ人が、日本の外来語がおかしくて学ぶ気になれないのと同じように、中国の人たちも、そんな日本語を勉強したくはなかったと思います。中国語としては、間違った、あるいは、かたよった漢字語、つまり日本製漢語というものを造り上げた。和製漢語ですね。こういうものを非常にたくさん造り上げた。それによって、近代化に成功したということがあると思います。

さきほどもご紹介がありましたけれども、私はトルコ語を勉強いたしました。いまも、ほそぼそと勉強しておりますけれども、そのトルコ国で、まだ完成しておりませんが、膨大な百科事典がいま、刊行中であります。その第1巻の総論のところ、日本のごとを書いております。それは、日本の近代化は、いま申し上げました和製漢語を造ることによってとは書いてありませんけれども、日本語でとり入れて、日本語で子供たちを教育することができた。これが、今

日の日本をつくりあげた大きな原動力だというようなことを百科事典の第1巻の総論のところに書いております。で、外国人もそのことを、トルコの人でさえそのことを認めているわけでありまして。でこのようにして、近代化、外来語のとり入れ、外国の概念のとり入れが始まったわけです。

それが、戦後、情報化とか国際化ということが一つの大きな動きになって来ました。情報が実に、多すぎるほど多いのですね。私は情報化時代の「化」というのは、あれは「化ける」という字じゃなくて、「超過」の「過」という字を書くべきだという、冗談をずいぶん早い時代に言ったことがありますけれども。情報が多ただけでなくて、どんどん変わるわけです。新しいのがどんどん入って来る。しかも、その情報が高度です。だんだん高度になる。で、そういうものに対して私たちは、明治維新の時と同じように、漢字二字を当てて人工的に組み合わせ、それを吸収するということが出来なくなってきた。その、出来なくなった理由は、ひとつには、漢学の素養というものが国民全般に落ちてきたということがある。もっと深くは、儒教というもの、儒教道徳といわれるものから、われわれ日本人が脱却してきたということが、いちばん根本にあると思います。漢字が、それに連動して減ってきた。それから、たとい漢字の素養があっても、明治維新からこんなにたくさんの漢語を造ってしまったんで、もうその、同音語をこれ以上造れないというような事情もある。それに、さきほども言いましたように、情報化、国際化の時代で、どんどん情報が入って来る。せっかく訳しても、それは半年しかもたない。何か、コンピューター関係の世界では半年ぐらいの周期でどんどん、変わってるようでありますけれども。そういうようにめまぐるしい変化がある。そうすれば、いっそ、その外国語をカナで写して、つまりいま私たちがいう外来語の形でとり入れよう・・・というようなことになったんだと思います。

たいへん有名な例は、ここに、中村妙子さんというICUの方がいて、その研究をなすったんですけれども、マス・コミュニケーションという言葉が入ってきた事例です。概念が入ってきた時、日本にはそういう概念がありませんでした。新聞とか、ラジオという言葉はありましたけれど、一度に情報をたくさんの人に放射するというような意味のマス・コミュニケーション、マスを対象としたコミュニケーションという概念はなかった。で、それをとり入れる時

に、ユネスコでは「大衆通報」と訳しました。大衆通報。たいへん正しい訳であります。マスは大衆、コミュニケーションは通報です。けれども、誰も使いません（笑）。誰も使わなかった。どうなったかという、マス・コミュニケーションと言った。しかし、マス・コミュニケーションでは、マ・ス・コ・ミ・ュ・ニ・ケ・ー・シ・ョ・ンと、拍でいうと九つになる。こんな長い言葉は日本語にはなじみません。そこでいまは、マスコミになった。たった四音、マ・ス・コ・ミ、これで安定したのです。そして、今やマスコミは、マスとコミを離して、コミが「くちコミ」とか、何とか、新しい和製英語か、和製洋語をさらに造りはじめている。「くちコミ」というのはまあ、混種語というんですけれども、日本語と英語らしきものとの、組み合わせであります。

そういう外来語に対して、いったい世の中はどういうふうにとめているか。まあごくふつうの考えは、この外来語の氾濫は困る。これはとても困る。どうするか。大野晋という私の親しい人は、「このままでいくと、日本語は滅亡する」と言いました。書きました。どうしてそんな変なことを書くのでしょうか。もし、そういうことを言うならば、英語はとくにこの地上にはないはずで、英語は70%以上フランス語およびロマンス語で、私の専門のトルコ語も1928年当時、85%はアラビア語とベルシャ語でした。けれども、なくなりません。そういうものではないんです。だけど、世の中は、なるべく、日本語に翻訳しようと言う。それはそれで結構なことで、反対できないですね。翻訳できればもちろん結構なことです。一時は、その外来語の氾濫ということをも嘆く投書とか、読者の声とか、そういうふうなものをしばしば目にしましたけれども、最近あまりそれは見なくなりました。最近それに代わって、外国人で日本にずっと住んで日本語のできる方からの、きっとご自分の都合でしょうね（笑）、「外来語を使いすぎる、自分の言葉をもっと大事にしろ」というようなお叱りを、ときどき読むことがありますけれども。

では、この日本の国民はどう考えているかということ、「表1」というところをご覧ください。1988年にNHKの放送文化研究所というところが「言語環境調査」というのをやりました。ここでは87年から毎年、言葉の社会調査みたいなことをやっております。88年に、これは首都圏であるサンプルをと

って、1000人ほどのサンプルでやっているわけではありますが、その結果は、なんと外来語歓迎なんです。(a)のほうをご覧ください。

表1 NHK放送文化研究所「第2回言語環境調査」1988

(a) 「意味がわかれば外国語 や外来語をいくら使っても かまわない」	(b) 「外国語や外来語を使うことにつ いて、どういう感想をお持ちです か」
そう思う 54%	新しい感覚が出せる 50%
そう思わない 35%	微妙な意味合いが出せる 33%
どちらとも	学のある人に見える 7%
言えない 10%	格好よく見える 5%
	意味がわかりにくくなる 37%
	日本語の伝統が
	破壊される 16%
	その人がキザに見える 10%

「意味がわかれば外国語や外来語をいくら使ってもかまわない。———そう思う：54%です。そう思わない人は、35%。もちろんこの中には、「意味がわかりさえすれば」という条件がついている。ですから、意味がわからなくては困る。ところが、日本人というものは、例えば私とある方が会話をしている。相手の方がたいへん教養のある方で、外来語というか、まあ、英語か外来語と英語の中間のもの———ことにICUではそういうことをよく経験しましたね、どんどん、ぶつけられる。そういう時に、私、日本人はですね、知らない言葉でも、知ったような顔をしなければいけないんですよ。「ああ、そうですね」と。それで、ひじょうに困る時は、あとで家にかえってからイミダスか何かを、こっそり引いて(笑)・・・あ、その当時、まだイミダスはなかったんですけども(笑)。その場で、相手のお使いになった外来語を、「それ、どういう意味ですか」と、そんなことは聞かない習慣がはびこってるわけですね。私は、東京大学の時はそれはやりました。学生が外来語を使うと、私は聞きました。「どういう意味だ」と。たいてい説明できないんです。しどろもどろですね。

「よくわからない言葉は使いな」というふうに、それはこちら教師ですから、そういうことを言ったのですけれども、それは特別の場合です。何かわからなくても、わかったような顔をしたほうがいいという、そういう雰囲気があるために、この、意味がわからなくても…だいじょうぶなんです（笑）。

私、ふしぎに思うことは、ある時、池袋の西武の二階でしたか、三階ですか——ご婦人ものばかり売っているところ全部、そこで目にする文字をカメラに撮ったことがあります。私の理解できない言葉がいかに多いか。いや、男性が婦人のことを知らないのは当然とおっしゃるけれども、しかし、言語学者ですよ（笑）。ところが、誰ひとりとして、西武は外来語を使いすぎるから私買い物には行かないわ、とはおっしゃらない、今日西武の方がいらしたらごめんなさい（笑）。むしろ、買い物にいらっしゃるんじゃないでしょうか。同じ品物でも、多少わるい品物でも（笑）、片仮名で書いてある、あるいはその、原語で書いてあるとですね、よく見えるということ、知ってるんです。もし、外来語が皆、そんなに拒否されるんだったら、西武はただちに明日から方針をかえると思います。ですから、この54%というのは決して計算のまちがいはありません。

どうして外来語がよろしいかということが、この表の右のほうにありまして、「外国語や外来語を使うことに関してどういう感想をお持ちですか」というアンケートもしたようです。そうしますと、「新しい感覚が出せる——50%」。これでしょ、西武がねらってるのは（笑）。それから、「微妙な意味合いが出せる」、これも33%。「学のある人にみえる」（笑）、これは意外に少ないですね（笑）。しかし、こういう人もまだいるんです、われわれの仲間には（笑）。学者と称する人の中にいるんですね（笑）。それから、「かっこうよくみえる」。まあ、これは似たようなものであります。

それに対してマイナスのほうの意見としては、「意味がわかりにくくなる」。これはやっぱり大きいですね。それから、「日本語の伝統が破壊される」、「その人がキザにみえる」（笑）。この、「学があるようにみえる」と「キザにみえる」は表と裏の関係だと思いますが、そういうようなことで、実は私も残念ですけれども、世は挙げて、外来語歓迎ムードなんです。そういう外来語ですから、日本語教育で、当然教えるべきじゃありませんか。当然教えていけば、

埼玉大学で0点っていうことは、いったいどういうことでしょうか…ということ
を、今日、申し上げたいのです。

これはアンケートですから、その内容、つまり、どうしてそうだというよう
なことまでは、つきつめておりません。そのことを二、三、これは私の考えで
申し上げますけれども、二番目の、「新しい感覚が出せる」とか、「微妙な意
味合いが出せる」というようなことについて、表の3をごらんください。

表3 和語／漢語／外来語

やどや	旅館	ホテル
はやさ	速度	スピード
いま	現代	ナウ
いいなづけ	婚約者	フィアンセ

これはもう、ある所に私は書いたことですが、同じ旅の途中に一夜の
やどりをする所を、「宿屋」といういい言葉が、つまり、やまとことばがあり
ました。けれどもそれを、もう私たちは見捨てました。そして「旅館」という
言葉を造りました。ちょっとよかったです。しかし、それも気に入らなくて、
「ホテル」という言葉をまた採用しました。そして、これは日本文化の特長で
すけれども、いったんとり入れたものはもう、放さない（笑）。ですから、こ
れを重層文化といいますけれども、いろんな文化が日本では重なってきて、と
り入れたものはともかく、置くんです。一つあれば十分でしょう。やめたらよ
かったのに、やめない。それでどういうことになったかということ、宿屋と旅館
とホテルは、ちょっと違うことになってしまいました。そうでしょう（笑）。
宿屋というのは、安い所か、ものすごい高い所か、まあ、だいたい安い所です
ね。たいてい、ひさしが傾いている所（笑）。そして、旅館は普通です。ホテ
ルは、いい所のはずです。ちょっと洋風で、しゃれていて…。ですから言葉が
いいから、ホテルと称することができない所までも、ホテルといっているとい
うことがある。ですから、へんなホテルがある。ホテルは必ずしもいい所ばか
りじゃありませんよ、というような文句をいわないで下さい。

言葉のイメージとして、あるいはコノテーションとして、ま、こういう外来

語は使ってはいけませんね（笑）。付屬的意味として、あるいは意味の一部として、「新しい」、「かっこいい」というようなイメージを外来語は持つてくるといことです。こういうふうになつそろっているのを、並べてみるとよくわかります。

「速さ」、「速度」、「スピード」。スピードといえは、必ず早いんです。おそいスピードとは言わないでしょう。言いますか。私は、言わない（笑）。ところが、速さとか、速度というものは、遅いとか早いとかいえる。「今」、「現代」、「ナウ」。ナウいとも言う。これもそうでしょう。「今」、なんてぼんやりしていますね。「現代」、もひじょうにふるい。「ナウ」というのは、まさにジャスト・ナウ、ちょうどいいじゃないですか。もつとも、このことは、もう、すたれているのであります。「いいなずけ」、「婚約者」、「フィアンセ」。いいなずけ、というものは、何か親が決めてですね、いやいや結婚する（笑）するようなのですよ。婚約者というとは、まあ、何でも普通ですね。フィアンセというとは、若くなきゃいけないですね、申し訳ないけど（笑）…。じゃないですか。かわい子ちゃんでないとは、フィアンセじゃない。私が今再婚して、紹介する時に、「私のフィアンセ」じゃ、おかしいね（笑い）。「私の婚約者です」とかいうのだったら、いいかもしれませぬ。言葉がそういう、イメージをもっているんですよ。けしからん、と言ったって、どうにもならない。こうなっている。

こういう三つ揃いの語彙というものは、非常にたくさんあります。ここには、たつた三つ、四つしか出しておりませぬが。これがアンケートで「新しい感覚が出せる」とか、「微妙な意味合いが出せる」というふうな答の内容だろうと思ひます。

それから、もうひとつは、その下にありますけれども、外来語というものは、遠回し表現にたいへん便利なものであります。表4をご覧ください。

表4 遠回し表現に利用

コスト	↔	（かかる）お金、値段、費用
コイン	↔	硬貨
アドバイス	↔	忠告

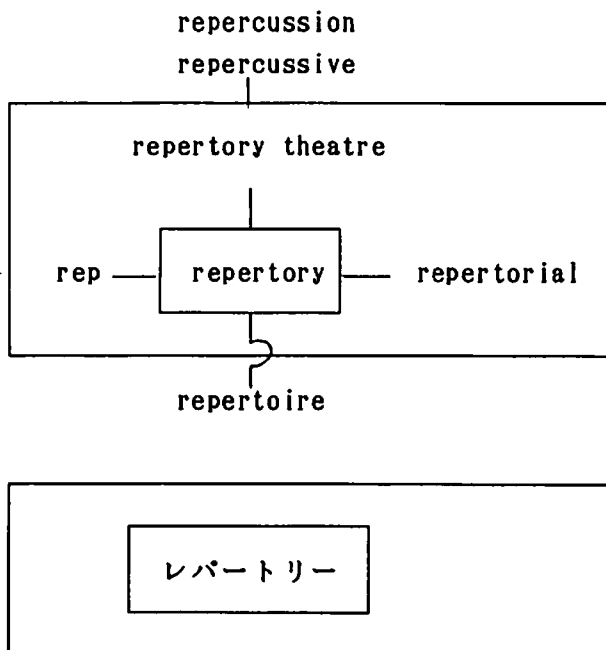
アンティーク	←→	古物
セックス	←→	性欲・性交
トイレ	←→	便所
アベック	←→	二人づれ
ハツ	←→	(牛 or 豚の)心臓

日本人はお金のことを口にするのは、われわれの世代では抵抗があるものなんです。お金のことを言わない。しかし、コストなら、言いやすいんです。同じですよ（笑）。硬貨なんていわないで、コインといえば、何か気分がいいでしょう。こういう例、「あなたに忠告します」を「あなたにアドバイスします」とやれば、やわらかいです。内容はおんなじでも、「忠告」では、喧嘩になりかねない。古くなった物とかを、古物（こぶつ）とか古物とか言わないでアンティークって言うと（笑）、ずいぶん高いですね。これ、言葉のせいで高いんじゃないかと私は思うんですね。また、セクシュアルなことでも同じです。ここにセックスと書いてある。これは私は平気で言えます。しかし、右のほうに書いてある言葉は、ここではちょっと発音できません（笑）。それから、その次も、トイレなら、こういう所で平気で言えますけれども、右のほうの言葉は、ちょっと、ことにご婦人の多いところでは（笑）、こういうことを口にすると軽蔑されますから、口にしない。「アベック」はいいですけど、「二人連れ」ってというのは、何かちょっと、あやしいですね（笑）。「アベック」のほうがいい。それから、これは、ごく特殊なことですけども、牛とか豚の心臓をハツといいます。これは英語のハーツですね、ハーツから変化した言葉で、「俺は牛の心臓が好きだよ」と言われるより、「ハーツがいいよ」と、こう言う（笑）。それが、ハツになる。これはなかなか粋な言葉でありまして、私は食べたことはありませんけれども、ものの本にあるものですから、ここにちょっと借用しました。

こういうような、直接言えないようなことを外来語を使うことによって言える。ますます外来語繁盛。こういうことになると思います。じゃ、お前は、外来語礼賛か、もろ手をあげて賛成かといわれると、どうも、そうもいえません。

で、一番、外来語をとり入れて困るというのは、たとえば、どんな言葉でもよろしい。とり入れると、それは孤立してしまうのですね。その例を、表の2のところでお覧下さい。

表2 repertory と レパートリー



たとえば、「レパートリー」という言葉、これは『発音アクセント辞典』に出ております。そのレパートリーという言葉、これは辞書の情報だけで処理しましたけれども、おそらく、レパートリーという言葉をもっているアメリカ人、イギリス人の頭の中には、表にして示した、こんなふうな関係で言葉がつながっていると思います。レパートリーというのとひじょうに近い言葉、レパートワールとか、下のほうにある、形容詞としてレパートリアル、それから、左のほう、レブという略語をつかう。それから、レバーという、接頭的な部分を共通にした、レバーカッションとか、レバーカシブという言葉…。こういう

ように、単語家族といえますか、近い意味の言葉どうしが集まって連想体系としてあるわけです、頭の中に。ところが、私たちがレパトリーという言葉を入力したとします。いや、NHKの辞書では、もう、したことになっております。外来語で入ってくると、下のように孤立無援、さびしいんです。1語も関連する言葉がない。これは結局、語彙のその部分が、ひじょうに薄手になるということなのです。これが、困るといえば困る。もし、英語のように言葉がつながっていれば、このうちの一つの言葉さえよく知っていれば、あとは類推がききます。互いに関係があるからです。しかし、日本語の中では、レパトリーと言っても、語形が部分的に共通の言葉さえない。トリーで終わる言葉には、サントリーぐらいしかない（笑）。そういうような、語彙体系の中で孤立させるという、この点がひじょうに問題なんですけれども、それがですね、近ごろは、それをも解決するひとつの手段が用いられるようになった。その主な手段は、和製洋語、あるいは和製英語です。たとえば、2枚目の表5というのをご覧下さい。

表5 外来語の語彙ネットワーク

○[bɪldɪŋ](building)		cf. 会	, 社
↓		会社	社会
/biruziŋu/ (ビルヂング)		会員	社交
↓		会席	社員
◎ビル → ◎丸ビル◎ビル街◎マネービル	(公) 会堂	社団 (法人)	
◎高層ビル◎ビル火災	会長	社殿	
◎ボディービル			
◎インテリジェントビル			
○野球：球の種類	ソフトボール	○ゴーイング	マイウエー
	スポンジボール	◎マイ	カー→◎マイカー族
投手の球質	スローボール	◎マイ	ホーム→◎マイホーム
	フォークボール		主義
	ナックルボール	◎マイ	ベース
	ビーンボール		

- プレイの種類 ファウルボール ◎フォアボール
◎デッドボール
◎クッションボール
◎パスボール (<passed ball)

ビルディング。この [] に入れたのは発音であります。この発音は辞書に出てくるような発音を書きました。それで () の中はいわゆる正書法で、スペリングを書きました。今日の話はスペリングには関係ありません。その、ビルディングという言葉が、明治時代に入ってきた。そうすると、それを最初は、ビルディングと発音したはずです。そして、文字はどうでもいいようなものですが、「ヂ」と出しております。丸ビルなんかも、丸の内ビルディングと書いてある。どこかにまだ残っているはずです。私は写真にとってあります。この「ぢ」が「じ」になるのには、ちょっと時間がかかったんです。今日は文字の話ではありませんが、ビルディング。ビ・ル・ヂ・ン・グ、こういうような母音をつけるところが、アメリカ人、イギリス人にとっては、辛抱のできないところですね。何ともさまにならない。しかし、それが日本語です。そして、ビ・ル・ヂ・ン・グをビルにしてみました。さあ、ビルにいったんなると、丸ビルもあれば高層ビル、つまりあとのほうにくっつける。それから前にきて、ビル街、ビル火災、混種語といいますね。日本語と外来語との組み合わせです。そしてなんと、日本で、マネービル、ボディビル、インテリジェントビル…みんな和製英語です。日本製の、英語らしきものです。こういうようなことが行われていますから、ビルという言葉の、あるいはビルディングという言葉の周辺…。ちょうど、レパトリーが、この、語彙家族をつくっているようなことが始まっているというふうに見ることができます。

その下に野球と書いてある。野球のその、ソフトボール、スポンジボール…これは、ボールの種類ですね。これは英語です。もちろん、日本語としても使いますけれども。次に、ピッチャーの球の質でですね、スローボールとか、フォークボールとか、ナックルボールとか、ビーンボールとか、いろいろなのがまだあります。そしてプレーのほうでは、ファウルボールとか。ここまでは英

語で、あるいは日本語としても使う言葉です。ところがちょうど、プレーの種類
の足りないことを補って、フォアボール、デッドボール、クッションボ
ール、パスボール。パスボールはバーストボールから変わったか、日本語のパス
とボールを組み合わせて造ったのかはわかりませんが、いずれにしても、フォ
アボール、デッドボール、クッションボール、パスボールというような、和製
英語を造ってしまいました。つまり、ボールという言葉の周辺に、関連する単
語をたくさん造りつつある…ということでもあります。

ゴイング・マイ・ウェイ。これは何か映画のタイトルだそうです。このマ
イウェイから、マイカー、マイホーム、マイペース…。で、マイカーから、マ
イカー族、マイホームからマイホーム主義と、これも全部、和製英語です。た
くましいじゃありませんか。つまり、日本で再生産をしているんですね。しか
し、こういう和製外来語といたしますか、和製英語といたしますか、あるいは混種
語ということについて、たとえば、英語教育の関係の人は、「ひじょうに困る」
、こういう言葉をはやらせるから、英語教育では困ると、おっしゃるんですけ
れども、日本語は英語教育のためにあるんでしょうか（笑）。ですから、それ
は英語では違うんだということを意識して使うしかない。やっぱり、これは危
険は危険なんですよ。私のたいへんよく知っている、ある研究所の部長ですけ
れど、パリへ行って、タレントという言葉フランス語だと思って、フランス
語風に「タラン」とかなんとか発音した（笑）…。ぜんぜん通じなかった。何
か足らんというわけです（笑）。ですから、そういう、これは国立の研究機関
の部長のような人が、そういうことをついやってしまうというのは、ひとごと
ではないわけです。ですから、こういう、和製、日本的外来語が多いというこ
とはやっぱり困る。困るには困る。しかし、これは日本語、これは英語だとい
うふうに弁別することは、これからやっぱり必要なことになってくるんだら
うと思います。そういうことで、外来語の孤立無援というようなことも、これ
から徐々に、補われてくるのではないかと、私は楽観的なことを申し上げてい
るわけでもあります。

さて次の時代は、これからいったいどうなるのかということでもありますけれ
ども、1ページの目次の1、2の中に書きましたが、近代化の流れ、情報化/
国際化、そして、この次の時代は、情報発信の時代が来ると思います。

目次

1. 日本語教育のウィーク・ポイント？
2. 外来語の環境
近代化の流れ → 情報化／国際化 → 情報発信
“和製漢語”の役割：“和製洋語”の役割
外来語の魅力
3. 音韻変換ルールの秩序
4. 外来語も学んで，“日本人らしい日本語を”

今まではすべて、受ける立場です。マスコミュニケーションという概念が来た、言葉が来た。それをとり入れる。これからは、こちらの番ですね。日本で造ったものすべてとは言いませんけれども、それを外へ出していくということもある時代、発信時代が当然来る・・・と。そうすれば、考えてみれば妙な、この和製英語というものも発信される可能性はじゅうぶんにある。もう、中国については、われわれは漢字を中国から学びました。そしてその、まったく人工的に、中国人に笑われるような組み合わせの「社会」とか、「会社」という言葉を造りました。しかし、彼らはそれを今度は採用してるわけです。韓国もそうであります。

以上のように、ギブ・アンド・テイクですから、これからは受け身一方ではなくて、積極的に発信していく時代だと思えます。その点でも、和製英語とか混種語ということについては、じゅうぶん観察しておく必要があると思えます。

それからもう一つ、この外来語を差別なく扱っていただきたいということは、もう今や外来語のパーセンテージは、いろいろな統計によって違いますけれども、先ほどからたびたび申し上げているNHKの『発音アクセント辞典』で言いますと、7.7%が外来語ですから、それほどのパーセンテージを占めるものをやっぱり無視はできない。その上、最後に申し上げたいことは、英語から日本語へとり入れる時に、まったくでたらめに、その場その場で勝手にとり入れているのではないということです。とり入れるルールがあるのです。そのことについて、一部、今日お話しすることにします。

ちょうど、中国の人が、日本語を勉強する時に、漢字の発音というのをひじょうに早くマスターしますね。それは、自分たちの漢字の音がある。そして、日本の漢字の音がある。それとの対応関係ですね、対応関係を書き出すところまでは行かないにしろ、頭でそれをつかまえる。ですから、すぐ覚えることができる、それと同じようにルールを自覚するならば、欧米の人たちも、日本の外来語というものを自分たちの英語の知識でじゅうぶんとらえることができると思います。もちろん、これは形だけのことでありまして、意味はまた別のことであります。

形のひとつの例として、2枚目の表6のところに、全般にわたる変換ルール、対応規則というようなものをあげております。

表6 音韻変換ルール

①	-C	→	C u	C = m, <u>f</u> , <u>v</u> , <u>s</u> , z, ʒ, l
②		→	Q C u	C = p, b, <u>f</u> , <u>v</u> , θ, ə, <u>s</u> , ʃ, t s, dʒ, dʒ, <u>k</u> , g
③		→	Q C o	C = t, d
④		→	Q C i	C = tʃ, dʒ, <u>k</u>
⑤		→	N	C = n
⑥		→	N g u	C = ɲ

① [gɔlf] (golf)

↓
/gɔ'ruhu/ (ゴルフ)

② [kik] (kick)

↓
/ki'ku/ (キク)

③ [bed] (bed)

↓
/be'Qdo/ (ベド)

④ [keik] (cake)

↓
/ke'ki/ (ケキ)

⑤ [gaun] (gown)

↓
/ga'uN/ (ガウン)

⑥ [gɔŋ] (gang)

↓
/gja'ŋu/ (ギャング)

全部出しても面白くありませんから、今日は、単語の最後にくる一つの子音を取りあげます。英語では最後に子音一つだけで終わる単語がたくさんありま

す。そういうような単語を日本語がとり入れるときに、どういうとり入れ方を
するかということ、きちんと書き出すことができるということを申し上げたい。
この表はこういうふう読んで下さい。一番は、ハイフンを付けたのは、
これは単語の終わりというしるしです。終わりに子音が一つある。そうすると、
ある場合はそれにウという母音をつける。どういう場合かという、Cが、m
か、fか、vか、sか、zか、jか、rか、lか、こういう場合は子音にウを
つけることで処理している。たとえば、下のほうにfの例があります。golfは
go-ru-hu、最後のフはもちろんfじゃありませんけども。今度は、pとか、b
とか、f、v。このf、vは、下に線をひいたのは、両方の場合があるという
わけで、f、vとか、θですね。さらに、ð、s、ʃ、ts、dz、dj、k、
g。こういう時は、前に促音が入る。例として、二番目にキックという例をあ
げてある。キクでもいいはずですが、しかし、われわれはキ・ッ・クと書きます。
「ッ」という促音を中に入れるというルールが決まっております。今度はCが
tとかdの場合には、促音を入れるほかに、ウをオに変える。どうしてオに変
えるかという、おそらくtuとか、duとかいう音節がなかったから、オの
ほうへ逃げて行ったんだろうと思います。今度はそれと平行して、イという母
音をつける場合は、tʃとか、dʒとかkの場合です。たとえば、4番目だと、
c a k e、これはケーキという人もいるかもしれないけれど、ケーキという、
イの母音をくっつける例をそこに挙げておきます。で、今度は、Cがnで終わ
った場合は、日本語のいわゆるはねる音、撥音で受け入れる。それからngの
場合は、N g u (ング)という音節が一つふえるわけですがけれども。こうい
うように、こうして、だいたいのところ、一つの子音で単語を終える場合の日本
語へのとり入れ方というのが、ちゃんとルールとして決まっている。このほか
母音の場合も、全般にこういうルールが出来ております。ちゃんとルールがし
っかりしているから、だから覚えなさいということをお願いしたいわけなんです。
それから、もう一つは、これは今日はじめてお話しすることですが、仮に長
音調整ルールという呼び方をしましたけれども、長音というもののとり扱いと
いうものは、もう少し、よく考えなければいけないと思います。どうしてこん
なことに気がついたかといいますと、実は私のたいへん親しいカトリックの神
父さんに、グローターズという人がいます。皆さんご存じだと思います。この

人の名前をオランダ語の発音から日本語に移すと、グロータースです。ところが、彼のところに来る手紙は何パーセントかは、私は自分で見ているんですが、「グロータス」と書いてあるんです。タースでなく、タスです。もっとも、この神父さんは自分の名前を中国風に「愚老足」と書いています。ふざけているんじゃないかと思うんですが、御本人は中国生活が長く、これは大まじめです。(笑) こんな漢字名前のせいでもないでしょうが、どうも日本人にとって、長音が二つあると、もちきれなくて、アクセント核から遠いところのものを、実は発音していないんじゃないか、こんなことを考えています。

たいへん問題になるのは、コンピュータという言葉で、コンピューターか、コンピュータか、ということです。文字の問題としては、コンピューターと書かないと何か、それこそ「学がない」ように思われる。しかし、今、自然科学の関係の学会では、コンピュータのほうが正式の用語になっておりますけれども、どうしてコンピューター、コンピュータと、ゆれているのか。これはどうも発音としても、どうやって観察したらいいかと思えますけれども、コンピューターとは言っていないんじゃないか。外国人はカナで書いてある通りにコンピューターと言うものだから、間が抜けた日本語になるんですけれど、そういう時はちょっと短くしなさいと注意してやる必要がある。

それから、ブルドーザー。これも日本語では長音が二つになっています。ですから、アクセント核から遠いところの、最後のザーというところをザにして、ブルドーザと、発音しているんじゃないかということです。ということは、こう発音していると考えると、次にお話しすることの説明にとても都合がいいのです。外来語のアクセントというものは、終わりから数えて3拍目にあります。3拍目にあると、ブルドーザというのは、終わりから数えて3拍目に来るじゃありませんか。もっともこの場合は、ブルドーザーも後ろから3拍目のところにアクセント核を置きたいところだが、そこは長音だからやむをえず一つ前のほうに行ったという、多少苦しい説明をしているのが普通です。けれども、そんなことをしなくたって、ブルドーザと考えると実に簡明に説明できます。これらは長音が二つある場合ですが、長音が一つの場合も、きちんとしたルールはたてられません、時にそれを短音にする。たとえば、マガジンというのは、アクセントがマガジーンとマガジーンと、二つあるようすけれども、説明し

やすいマガジンというほうをとるとするとですね、ジーと長いのに、今はマガジンですね、こういう例もある。

長音ということについて、今日は本当に初めて申し上げるのですが、皆さんがそれはおかしいわ、変だ、とおっしゃるかもしれませんが、どうか、ときどき、自分の発音とかひとの発音を注意してみてください。たとえば、関西ではコーヒーとは言いません。コーヒと、言います。ヒコージョー（飛行場）とは言わないで、ヒコージョと言うそうですね。そういうことをとりあげた随筆を読んだことがあります。それは関西のことで、東京は違うんだ。コンピューターだと、おっしゃるならそれでもいいんですけども（笑）、どうも、カナに書いてある通り、コンピュータア、グロータースと、こう言うと、日本語として間が抜ける。その、間が抜けると感ずる、その理由は、一つ。何かこういう長音調整ルールというものが、働いているのではないかということを感じます。これは今日、日本語の現場で働いている皆さんに一つ課題としてお話しします。もう、私は若い人たちの発音を聞くチャンスもだんだん少なくなりました。私の近くには老人しかおりません（笑）もので。ですから、どうか若いひとの発音をよくお聞きになって、長音の問題というのを注意して行きたい。そういう意味でも、今日、申し上げたわけでありませぬ。

そして、ついでに、表の8は、今申し上げた、外来語のアクセントのことでありますが、外来語のアクセントは終わりから三つ目にある。あると言っても、だいたい70%程度で、100%あるわけじゃありません。多くのものが終わりから三番目にある。

表8 英語、日本語アクセント対応表

	英語／日本語		
①	+	／ +	263 (30.7%)
②	-	／ +	166 (19.3%)
③	+	／ -	298 (34.6%)
④	-	／ -	131 (15.3%)

『日本語発音アクセント辞典改訂新版』（1985）

4, 394語からのサンプル1, 464語から得た858語
／の左側の+は、外来語のアクセントの位置が英語のアクセ

ントの位置に一致することを、－は、一致しないことを表す。
／の右側の＋は、外来語のアクセントの位置が終りから3拍目にあることを、－は3拍目以外にあることを表す。

最近ちょっと、4, 394語から858語のサンプルをとって調べる機会がありました。この①の＋／＋というのは、英語のアクセントのあるところに日本語のアクセント核がよく対応している。そしてそれは、日本語としても、終わりから数えて三つ目の拍にある。さっきのベッドもそうですね。ベッドというのは、どうせ英語は1音節ですから、ベッドのeのところにアクセントがあるわけです。日本語もベッドでeのところにアクセントがあります。

いろいろな場合の組み合わせをつくって、その度数を調べますと、ともかく、英語と日本語とは、そのままで、アクセントの位置が合ってくる、つまり、英語のアクセントがそのまま日本語の核に移ってくれば、それがだいたい終わりから三つ目だということが、数の上で10回のうち3回はあるというような数字が出ているわけでありませう。

こういうように、外来語はもちろん、いまお話ししているのは、その、研究の上の面白さを私はひとりで楽しんでいるわけでありませうけれども、ただ面白いだけではなくて、やはり日本の外来語には、すでに外来語としての歴史がある。ルールがある。もとの言葉との関係もちゃんとついている。そういう言葉ですから、どうか最初に申し上げたように、やまとことば、漢語とおなじように外来語も可愛がってほしい。これも日本語だということをお忘れなく。日本語教育の現場では、ドリルかなんかで「花が咲いた」とか、「鳥がうたう」とかいう、やまとことばだけの文を教えていらっしやるかもしれませんが、「ホテルに泊まった」というようなセンテンスもどうか、ドリルの中にお入れになって、ホテルは宿屋とはちがうんだ、旅館ともちがうんだということまでは、最初は教えられないかもしれませんが、時間をみて、そういうこともお教えいただいたら、外来語ということについての認識も深まるのではないかと思います。

どうも、ご静聴ありがとうございました。（拍手）